

# 企画展「大昆虫展 - 虫のせかいはふしぎがいっぱい - 」開催物語

齊藤明子

「大昆虫展-虫のせかいはふしぎがいっぱい」(以下、昆虫展)は、平成20年7月5日(土)～8月31日(日)、開館20周年記念事業のひとつとして開催されました。当館初の大規模な昆虫展として、毎日多くのお客様で賑わい、この年の夏は怒濤のように過ぎていきました。

## 実施体制

展示の企画、制作は齊藤明子、宮野伸也、山口剛、尾崎煙雄、加藤久佳の5名で、資料管理研究科(筑紫敏夫・御巫由紀・駒井智幸・友田暁子)が起案・広報(当時、企画調整課は無かった)のほか、開催期間中の展示室のメンテ、クイズ大会の実施などに関わりました。

## 展示の工夫

小さい昆虫標本を、全面ウォールケースの第1企画展示室でどうやって見せるかが難題でした。標本箱をウォールケースの奥に並べたのでは見る人から標本が遠くなり、昆虫に興味の無い人の目には箱が並んだ景色



としか映らないでしょう。私には見る人に昆虫の美しい色、すばらしい形、その不思議さを感じて欲しい、という強い思い

があり、それを実現するため、標本箱が3段2列に入る木製箱をウォールケースの内側からガラスに密着させる、という画期的な方法を考えました。木製箱は後ろから「突っ張り棒」で支えました。照明をすべて天井のスポットライトに頼らざるを得ない、という難題がありましたが、結果的に大成功でした。出来上がってみると、企画展示室からウォールケースの存在が消え、全面昆虫の壁という異質な空間となりました。子供たちが企画展示室の入口

に立った瞬間の「わっ！」という表情を見るのが私にとっては何よりもうれしい瞬間でした。

## 展示構成

昆虫の多様性についてより理解しやすい展示構成を、と熟考した結果、色、模様、くらし、大きさ、形などの大項目を設け、



たとえば色別の昆虫、ツノを持つ昆虫、世界最大の昆虫など、分類群にかかわらず標本箱に自由に並べました。さらに子供たちが大好きなクワガタ・カブトを、流行っていた“ムシキングカード”(企業様からご提供いただきました)の実物と一緒に標本箱に並べたコーナーも設け、案の定、このコーナーには子供たちが釘付けでした。

## 「クイズの箱」

9つの標本箱にクイズを仕込み、参加者ひとりずつに答え合わせと解説を行い、昆虫カードをプレゼントする、というワークシートを行いました。受付回答総数は10,305を数え、職員3名



とボランティアが毎日交代で答え合わせに入りました。来館者の多い日は「クイズの箱」の前は人だかりとなり、答え合わせコーナーに行列ができるほどの大人気でした。答え合わせはたいへんな重労働でしたが、クイズという仕掛が子供

たちの「気付き」につながる、ということを実感しました。この企画の成功は職員だけでは到底成し得ず、多くのボランティアの皆様に支えられたからこそ実現できたことでした。

## 昆虫展ボランティア

「昆虫展ボランティア」の募集を、前年度と開催年度の4月に行いました。目的を昆虫展の開催に限定した期限付きのボランティア制度です。その結果、平成19年度は40名、20年度は継続も含め65名の小学生から70歳代までの虫好きが集まりました。中学生以上の博物館離れが顕著な中、小学生の時に私の講座に参加したという高校生の応募には胸が熱くなりました。開催の前年から募集を始めた目的は、ボランティア同士が仲良くなること、博物館の裏側を知ってもらうことです。さらに開催年のイベントがぶっつけ本番とならないよう、「虫にさわろう！」という当日参加型イベントの虫の準備から当日のお客様対応を、「生態園昆虫調査隊」では参加者への指導、後の標本作りと同定までを前年の春から夏に行ってもらいました。秋以降は展示標本の準備など、いよいよ展示本体の準備をお手伝い



いただきました。そして、開催の年には新たなメンバーも加わり、前述のクイズの答え合わせだけでなく、イベントの企画から実施、チラシの仕分けや展示室の踏み台作りなど、すべてにおいてボランティアの方々の力無くしては実現不可能でした。ボランティアの最終的な活動延べ日数は 659 人日という膨大な日数となりました。このように、目的意識を共有したボランティア集団の原動力が、昆虫展を成功へと導いた要素であったと思います。

### 「チョウの羽化を見よう」

「チョウの羽化を見ようーその一瞬を見のがすな！」と題して、チョウの羽化の瞬間を目の前で見せる、というイベントを2回実施しました。講師は、初代友の会会長の故矢野幸夫先生、そして矢野先生が確立したノウハウを引き継いだ長澤洋子さんです。長澤さんが行ったチョウの蛹の準備はとてつもなく大変な作業です。開催日に合わせてチョウに産卵させ、蛹になるまで飼育し、指定した時間にしかも複数のチョウを同時に羽化させるための温度調整を行うのですから。これもお二人の存在があってこそ実現した企画でした。



### 養老孟司先生の講演会

昆虫好きで著名な養老先生をぜひ講演会講師にお呼びしたいと考えました。先生が最も興味をお持ちのゾウムシが私の専門であるカミキリムシと同じ甲虫である、ということが幸いし、学会や虫好き仲間繋がり、2年も先のことにもかかわらず快諾下さいました。定員 200 名、往復ハガキのみの事前申込制とし、倍率 2 倍以上の抽選となりました。チラシに載せさせていただいた養老先生の顔写真は、集客面で影響が大きかったのではないのでしょうか。ただ、残念なことに、講演会当日が近隣施設でのイベントと重なってしまい駐車場が満車、周辺道路が大渋滞となり、多くの当選者が間に合わなくなったようです。当選者 200 名のところ参加者 165 名となって会場に空席ができ、養老先生には申し訳ないことをしてしまいました。いくら人気があっても、博物館の立地条件による入館者数の限界を改めて認識させられました。

### 生きた昆虫の展示

子供たちは生きている昆虫が大好きです。しかし、当館のような総合博物館では、資料の保存環境の観点から生き物の展示は難しいことです。そこで展示フロア中央にある光庭にミツバチの巣を置き、生きた展示物としました。ガラス越しに安心して観察できることもあり、大人にも好評だったようです。ミュージアムトーク「決死！ミツバチのお世話」で、光庭に出た宮野さんがミツバチの群がった巣盤を取り上げながら解説する



時には巣の前に人だかりができました。さらに、子供たちに人気のある外国産の生きたクワガタムシ、カブトムシを無償で借り受け、トピックス展「生きた虫も見てみよう」を生態園オリエンテーションハウスで同時開催しました。こちらも本館と合わせて喜んでいただけたようです。

### 広報について

チラシの印刷は3月に行い、ゴールデンウィークより前に館内での配布を始めました。印刷部数も当館としてはこれまでで最多の 150,000 枚、内 38,590 枚を千葉市内の 65 校の全児童配布しました。開催直後の土日の入館者数が両日共 1000 人を超えたことは、何らかの方法で事前に開催を知った人が多かったということです。これは学校への全児童配布の効果が大きかったと感じています。大量のチラシを仕分ける気の遠くなる作業はすべてボランティアの方々にいただきました。だからこそ仕分け作業に昆虫展担当以外の職員の手を借りることも無く、担当者は展示の準備作業に専念することができました。

### おわりに

人気のある昆虫、深海生物、恐竜を展示すれば来館者数が多くなるのは間違いはありません。しかし数字の裏には、それぞれ担当した職員のさまざまな工夫や努力がある、という一例をここに書かせていただきました。とにかく展覧会の開催は大仕事です。また、年々、社会情勢の変化などで博物館でも活動が制限を受ける場面が多くなった気がします。昆虫展についても、今後も同じことが出来るか、と問われれば答えはノーかもしれません。しかし、この思い出話がこれから展覧会を担当する若い職員の少しでも参考となれば幸いです。なお、昆虫展を含む平成 19～28 年度の各展覧会の入館者数データについては、奥田(2018)\*で詳細をご覧ください。

\*奥田昌明. 2013. 平成 19～28 年度の入館者統計データに基づいた、中央博物館本館における常設展リニューアルの必要性ならびに方向性. 千葉中央博自然誌研究報告(J. Nat. Hist. Mus. Inst., Chiba) 14(1):47-64.



(自然誌・歴史研究部)